

臨床研究

# 歯列不正で高まる疾病リスク

## —小児における歯科用コンビームCT撮影の有用性—

濱 克弥 (千代田区)



「見た目も大事だけど、噛み合わせの全身への影響が心配で…」最近、お子さんをお連れになる保護者の訴えも変化してきた。幼・小児時の歯の萌え替わりは、その子の将来を大きく左右することにみんなが気づき始めた。しかしながら、現在の医療制度はそのことには全く対応していない。日常の症例を通じて、問題点を明示してみたい。

患者さん：7歳男児

主訴：噛み合わせが明らかにおかしいので、診てほしいとお母さんに連れられて来院。背骨が曲がっていると整体治療に通っている。

口腔内所見：噛み合わせが深く、下顎前歯が見えない(図1)。正中が偏位している。左右の水平的咬合平面が乱れている。空隙のないclosed typeの乳歯列である。



図2 パノラマX線写真 (2009年2月25日)



図1 初診時の口腔内の状況(2009年2月25日)

### ●診療経緯

永久歯への交換状態の診断のため、パノラマX線写真を自己負担にて撮影。しかし、パノラマ撮影の特性から、下顎前歯部の永久歯胚が明確に確認できない。(図2) そのため、デンタルを追加撮影した。ところがそれでも確認ができない(図3)。後日、保護者の了承を受け、歯科用コンビームCT撮影を行ったところ、明確に状況を確認できた(図4・5)。

### ●結果

下顎の前歯では、スペース的にかなり入り組んでいるものの、永久歯胚の数は正常であった。ただし、上顎でB.Aの根尖付近に歯牙腫様の不透過像が見られ、このためか、2の歯胚が上方に偏位している。また5の歯胚が欠如していた。

### ●歯列の診断

上下顎とも、歯列弓の狭窄、過蓋咬合、咬合の不安定、正中の偏位がみられる。

### ●治療方針

上下歯列弓の拡大を行う。前後・左右的な顎偏位があるため、スプリント機能を併用する。低年齢ということもあり、まず拡大を先行し、慎重に経過を見なが

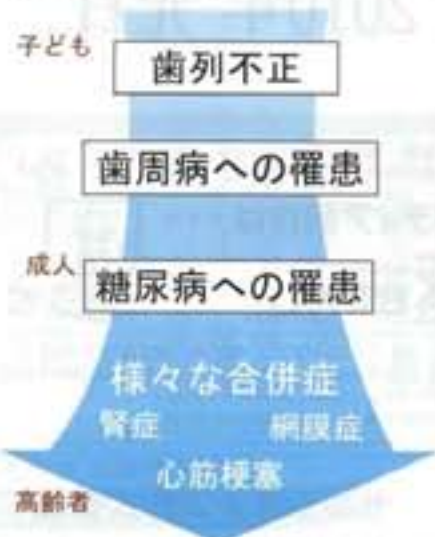
ら、歯胚その他の問題については対処していくこととした(図6・7)

治療開始して2カ月に母親から、背中のひどいコリが治り、通院していた整体の先生から驚かれたと報告があった。

### ●小児期の咬合が生涯のQOLの要に

東京都のデータでは小児のう蝕は明らかな減少傾向にあり、歯科疾患の対策、なかでもう蝕に対する対策はかなり功を奏しているのではないだろうか。これからは、将来ある子供たちの治療において、「むし歯」や「歯肉」への対処だけではなく「歯並び・噛み合わせ」の予防・改善(治療)についても積極的に取り組んでいくべきであろう。歯列に関しては、早期の診断が大切で、今回の症例のように歯数の異常等は今後の治療の方向付けや、すぐに治療を開始しないにしても、保護者に情報提供をしなければならない。今回のケースでは、診断に当たってCTを用いたが、一般的にCTの普及度は低く、通常はパノラマX線撮影が用いられている。しかし、歯並びや噛み合わせの診断としては、パノラマX線撮影ですら保険適用となっていない。制度的な改善の必要性を痛感する。人間は上下の歯を噛み合わせることで、バランスをとって2本足歩行をしている。小児期の噛み合わせは全身の健康な発育に非常に大きな影響をもつ。歯列が入り組んでいれば、清掃性が悪く、それぞれの歯を支えている

### 歯列不正で高まる疾病リスク



歯槽骨が不揃いになるため、歯周組織が悪化することは、誰でも容易に予測できる。重篤な歯周病の大人の患者さんを多く診るたびに、若年時に歯列の改善を行っていただければここまで悪くならなかったのではと思う(図8)。

さらには近年、糖尿病をはじめとした、全身疾患と歯周病の関連が明確になるにつれ、「歯」の問題だけでなく、QOLの向上のためにも、小児期から良い口腔状態を維持させるためのシステム作りが急務である。



図3 デンタルX線写真 (2009年2月25日)

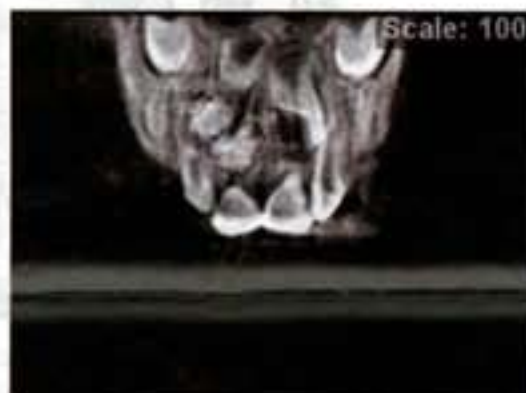


図4 CT画像(2009年2月26日)

図5 3D画像(2009年2月26日)



図6 スプリント機能付拡大プレート装着時(2009年6月3日)



図7 プレート装着から2ヶ月後(2009年8月19日)



図8 25歳女性の口腔内の状況。歯列不正はさまざまな歯科疾患のリスクファクターになる(2009年9月30日)